

東京大都市圏における若者の日帰り観光・レジャーの時間的・空間的特性

—大規模人流データによる分析—

杉本興運

首都大学東京都市環境学部

本研究では、東京大都市圏における若者の日帰り観光・レジャーの時間的・空間的特性を、大規模人流データの分析結果から検討した。外出時間に着目した時間的特性の分析では、年齢が高くなるにつれて観光・レジャーの活動時間が昼間だけでなく夜間にも拡大すること、成人では学業、労働、家事を主体とした職業・学生種別がそれぞれもつ生活上の制約によっても観光・レジャーの活動時間に差異が生じること、性別比較では男性より女性の方が夜間での観光・レジャーをする人の割合が大きいことなどが明らかとなった。訪問先に着目した空間的特性の分析では、若者全体で浦安市が最も人気の訪問先ゾーンであること、それ以外のゾーンを類型化すると特定タイプの若者の訪問が目立つゾーンや様々な属性の若者が多く訪れるゾーンが抽出され、特に後者は若者の観光・レジャーにとって重要な地域であること、昼夜別かつ男女別で訪問先選択の傾向が異なることなどが明らかとなった。

キーワード：若者、日帰り観光・レジャー、行動空間、東京大都市圏、パーソントリップ調査

I はじめに

1. 研究の背景

1) 若者の観光・レジャー

若者に焦点を当てた観光・レジャーの研究は、「若者の旅行離れ」と呼ばれる現象を共通の課題認識とし、その解決に資する知見提供を目的として活発化している。その背後には、若者の旅行を活性化することが、将来の観光・レジャー産業の維持や発展を促すという期待がある。特に若者の国内宿泊旅行と海外旅行において、旅行離れの傾向が顕著である。例えば、観光庁（2011, 2014）では若者旅行振興政策の一環として、若者の国内旅行および海外旅行の実態や今後の旅行意向に関する調査を実施し、子どもの頃の旅行経験がその後の旅行実施頻度に影響を与えるという結果を示している。中村ほか（2014）の一連の研究では、若者の海外旅行の阻害要因を心理学の観点から分析し、「滞在不安」「計画負担」「同行者・自分（に関する事柄）」「言語不安」「時間不足」「金

銭不足」の六つがあることを明らかにしている。また、海外旅行に行くか・行かないかの意思決定プロセスでは、これら阻害要因に加え、動機づけ、すり合わせ努力、自己効力感が互いに影響を及ぼしながら進むことを示した。奥山ほか（2010）や日比野・佐藤（2012）は、若者の国内宿泊旅行や生活実態に関する数種類の統計資料を使用し、その経年変化をみることで、若者の旅行離れの要因を分析している。その中で、時間的・金銭的な余裕のなさは旅行をしない大きな理由ではあるが、若者の旅行離れという現象の直接的な要因ではなく、むしろ若者の余暇時間の使い方に関する生活様式や価値観の変化とそれによる参加者数の減少が旅行離れに影響している可能性が高いことを示した。山口（2010）は、日本における若者の海外旅行の変化を観光に関わるメディアとそれらが生まれた社会背景から整理し、海外旅行離れの要因は、リゾート地やアジアの都市を目的地としたスケルトンツアーの隆盛によって、どこでもショッピングやグルメを中心とした画一的な体験しかで

きなくなったことにあとと考察している。

一方で、若者による日帰りや短時間での観光・レジャーを扱った研究は少ない。日帰りや短時間での観光・レジャーは、若者に限らず潜在的な顧客が多く居住する都市部で活発であり（落合、1999）、市場と消費空間が近接している。そのため、都市住民にとって、時間的・金銭的コストの大きい国内宿泊旅行や海外旅行と比べて、日帰りや短時間の観光・レジャーは実施しやすく、自ずとその規模は大きくなる。そして、彼らの主な訪問先となる地域は安定的に観光・レジャー収入を得ている場合が多いと推察される。こうしたことから、課題解決を志向とした研究が発展してこなかったと考えられる。実際、当該テーマを扱った数少ない先進事例である落合（1996、1999）の研究では、首都圏に居住する大学生の観光・レジャー行動を分析しながらも、その結果から導出される人間行動の空間選択のパターンに普遍的に関与する本質的な要因の解明に重点を置いている。また、都市住民の多様な行動を網羅的に把握するだけの調査手段がなかったことも考えられる。他方で、2010年以降の社会学やマーケティングの分野にみられる「若者論」では、若者の文化や消費行動の議論の中で、若者特有の観光・レジャーの実態を取り上げ、その解明を通して地域振興や企業のマーケティング活動に有益な知見を提供しようとする動きがある。例えば、藤本（2015）は経済不況やSNSの普及といった現代の社会環境で育った若者の消費性向やコミュニケーション方法を議論する中で、若者が観光・レジャー活動において「仲間との連帯」「イベント」「フォトジェニック」といった価値観を重視するようになったとし、若者市場へのアプローチには、これらを考慮した広告や宣伝が必要だと述べている。また、原田（2016）は、若者の中でも特に情報感度が高く流行を広める役割をもった人々を対象に、その層を中心とした情

報伝播の流れと若者に人気の観光・レジャーの流行過程との関係进行分析し、彼らの重要性を説いている。これらの分野で若者研究が活発な理由は、他世代より情報感度の高い若者は長らく中心的な消費者であり、かつ次世代の消費トレンドの鍵を握っていたため、その実態調査が必要不可欠だったことにある。ただし、若者の嗜好や行動とそれをもたらし社会状況が関心の中心であり、地理学のように消費の対象空間を重要な要素とみなして分析することは少ない。

しかしながら、観光・レジャーという現象が行為者と対象空間の相互作用によって成り立つ以上、対象空間の性質を議論に含めることは重要である。例えば、東京都の原宿や渋谷は「若者の街」として知られているように、若者にとって観光・レジャーの重要度が相対的に高いと言われる地域が存在する。しかし、先行研究では、実際に若者が観光・レジャー目的でどこにどれくらい訪問する傾向にあるのか、という疑問に明確に回答可能なほど、データに基づいた分析は行われていない。このことは、若者の観光・レジャーの行動実態が空間選択という視点から十分に研究されてこなかったことを示している。大型施設の開発や再開発が次々に進む東京都では、原宿や渋谷以外にも、若者が観光・レジャー目的で訪れる地域は今や数多く存在するだろう。現在の若者の観光・レジャーの空間選択を明らかにし、それを誘発する地域の特性を検討することで、当該研究テーマの知見を深化させることができる。そしてもう1点注目すべきは、年齢や職業・学生種別にみられる若者の属性である。個人が幼児、子ども、若者として成長するにつれて、学習環境も同時に幼稚園、小学校、中学校、高等学校、大学へと変わる。その後の就職や結婚を合わせると、幼児から若者の約30年間にライフステージが次々と移行する。観光・レジャーの選択には、個人の自己裁量と社会

環境の制約が影響するため、ライフステージが異なれば観光・レジャーの形態や行動空間も異なる傾向を示すことが予想される（若生ほか，2001）。

2) 観光・レジャーの行動空間

地理学における観光・レジャーの行動研究では、行動の空間パターンに着目しながらも、対象空間が重要な関心事であることから、観光・レジャー行為者の空間選択の傾向とその要因解明が主要な研究テーマとなってきた（落合，1999）。そして、対象空間の特性を明確化するためには、観光・レジャー訪問先の位置や相互関係あるいは機能を考慮した分析が必要となる（落合，1991）。先行研究では、活動頻度や旅行距離を基にした観光・レジャー形態の分類とその行動空間の構造に関する研究（高橋，1987；落合，1991；澁谷，2016）、ライフステージによる生活の違いが観光・レジャーでの訪問先や同行者の選択にもたらす影響に関する研究（若生ほか，2001）、旅行距離によって変化する観光行動の同心円性の検証に関する研究（滝波，1994；小島，2008；杉本・小池，2015）などがある。また、時間地理学にみられる「制約」や「時空間プリズム」の概念を分析に取り入れ、観光・レジャーの行動を時間と空間の二つの側面から解明しようとする流れもある。このタイプの研究では、特定の観光・レジャー施設あるいは観光目的地の内部において、観光・レジャー行為者の移動・滞留を包括した行動の時空間パターンを抽出し、その誘発要因を明らかにする（杉本ほか，2013；矢部・倉田，2013；杉本，2017）。調査方法として、従来の活動日誌、高精細な時空間解像度で現在位置を測定できるGPSロガー、大勢の移動軌跡が長時間蓄積された大規模人流データが利用される。特に、最近の大規模人流データには、（プライバシーが配慮された上での）個人属性の情報も含まれているため、若者

といった特定の年齢層を抽出し、その行動を詳細かつ網羅的に把握することができる。

前節で述べたように、若者の日帰り行動圏内での観光・レジャーの空間選択を扱った研究は少ない。そして、落合（1996，1999）の研究では、大学生という特定の若者だけを扱っている。同年代の若者の中でも、大学生、労働者、主婦・主夫とでは生活における時間や空間の規律が大きく異なる。その違いが結果として観光・レジャーにも異なる時間的・空間的模式を生じさせると考えられる。例えば、大学生は混雑を避けるため、繁忙期での人気の観光地への訪問を避ける傾向があり、これは時間的制約が比較的緩いという彼らの生活の特異性に起因する（落合，1999）。こうした点をふまえると、時間地理学の主な対象となる1日という時間スケールにおいても、若者の属性によって観光・レジャーの時間的・空間的特性に異なる傾向がみられる可能性がある。生活時間の観点からみると、個人の行動において観光・レジャーは任意性が高く、活動空間と活動時期の固定性が低い（岡本，1995）。そのため、一般的に観光・レジャーは平日の学校・仕事帰りや週末あるいは祝日に行われる。若者の中でも労働者はこの一般的傾向と合致するであろうが、大学生などそれ以外の若者では、これに当てはまらない可能性が高い。よって、若者を一括りに捉えるのではなく、属性による行動の違いをみる必要がある。

2. 研究目的

以上をふまえ、本研究は東京大都市圏における若者の日帰り観光・レジャーの時間的・空間的特性を明らかにすることを目的とする。より具体的には、東京大都市圏という空間範囲および1日という時間スケールに焦点を当て、そこでの若者による観光・レジャーの活動時間や訪問先にみられる特徴を明らかにする。また、若者の属性による

行動パターンの差異と、それをもたらす要因についても検討する。落合（1999）によると、東京都市圏から70-80km圏内が大学生とての日帰り観光中心の地域であることが判明しているため、東京大都市圏は本研究の対象地としてふさわしいと判断した。若者の行動を分析することは、今後の観光・レジャーのトレンドを占う鍵になる（落合，1999）ことから意義がある。また、「ナイトタイムエコノミー」という夜間での経済活動の重要性が注目されているが（木曾，2017），若者はその一翼を担う潜在性を有している。そのため、夜間も含めた都市圏での若者の日帰り観光・レジャーの実態を明らかにすることは、今後の都市・観光政策にとって有益な知見となりうる。

これまで都市圏での日帰り観光・レジャーを網羅的に把握することは、都市部での活動目的の多様さや十分なサンプル数を確保することの困難さから実現できなかった。しかし、2010年以降は公的機関や民間企業によって、都市部を中心に様々な大規模人流データが整備され、観光行動分析への活用もなされている。本研究では、個人属性の情報が豊富なパーソントリップ調査を基とする大規模人流データを使用し、上記の研究目的を達成する。

3. 用語の定義

1) 若者

「若者」という言葉が使われ始めたのは1960年代後半から1970年代であり、それまでは「青年」の方がより一般的であった（古市，2015）。戦後の高度成長期で所得が増加し、一億総中流の時代に突入したことで、社会階級と代わって世代への意識が芽生えたことに端を発しているという（古市，2015）。現在の日本における若者の定義は、年齢から決定することが一般的である。しかし、若者に該当する年齢幅については、政府の公的な

規則や資料でも統一された基準がない。厚生労働省の若年者雇用では15～34歳を、内閣府の子供・若者白書では15～29歳を、観光庁の各種調査では20～29歳，18～25歳，18～39歳を，若者とみなしている。本研究ではこれらを参考にしながら，各定義に概ね共通する範囲となる15～34歳を若者とみなすこととする。さらに，15歳未満の「子ども」についても，広義の若者を構成するものとして，また，先ほどの狭義の若者との比較対象として位置付け，今回の分析対象に含める。

2) 日帰り観光・レジャー

観光庁の実施している旅行・観光消費動向調査では，日帰り観光旅行を「日常生活圏を離れ，片道の移動距離が80km以上で，所要時間（移動時間と滞在時間の合計）が8時間以上の旅行であり，通勤や通学，転居のための片道移動は除く」と定義している（観光庁，2017）。しかし，この定義は本研究のように東京大都市圏での観光・レジャーを扱う際に適切とは言えない。なぜなら，現代の発達した交通網を利用すれば，都市圏での日帰り旅行，特に都心部を目的地とした旅行は，所要時間に8時間以上かけずとも，より短時間で実行できる。また，落合（1991）では，都市住民の余暇活動を「平日型」「週末型」「期末型」に区分し，後者になるほど非恒常的で，目的地への到達時間が長くなるとしているが，若者を対象とする場合，自由時間の多い大学生の行動は，必ずしも三つの区分には当てはまらない。より柔軟な定義として，澁谷（2016）は「6時間以上の非日常的な余暇時間の外出」を日帰り観光とみなすことを提唱している。さらに，彼は吉田ほか（2008）の研究を参考に，「6時間未満の非日常的な余暇時間の外出」を短時間観光，それら以外の「外出時間に関係なく月1回以上の日常的な余暇時間の外出」を日常的余暇としている。本研究では，都

市部での観光・レジャーの定義を緻密に検討した吉田ほか（2008）や澁谷（2016）を参考にしながら、外出時間の長短に関わらず日帰りとは判別できる観光・レジャーの行動を、日帰り観光・レジャーとして分析する。

II 研究方法

1. 使用するデータ

本研究で使用する大規模人流データは、東京大学空間情報科学研究センターが提供する「人の流れデータ」である。これは、全国の都市圏で実施されたパーソントリップ調査のデータを基に、個人の1分おきの地理座標を推定したものであり、CSVファイルとして提供されている。属性情報として、ID、年齢、性別、職業・学生種別、トリップ目的、交通手段などが含まれている。本研究では、東京大都市圏の2008年10月1日のデータ¹⁾を使用する。トリップ目的に「観光・行楽・レジャーへ（日常生活圏外）」が含まれているため²⁾、ある時点で観光・レジャーをしていたか否かを判別することができる。このデータから、「発着地（0:00と23:59）のゾーンが同じで、かつ観光・レジャー目的の活動を1度でもしていた」人々が日帰り観光・レジャーの行為者となる。

全データは約56万人分の移動軌跡情報が格納されており、総レコード数（全地点データ数）は約8億にもなる。この膨大なデータを効率的に処理するため、リレーショナルデータベース管理システムであるPostgreSQL/PostGISを利用した。まず、取得したCSVファイルから全データをデータベースに格納し、空間データ変換をした。次に、SQL構文を使って「日帰り」かつ「35歳未満」の条件に当てはまる1,698人分のデータを抽出し、新たなデータベースを構築した。そして、PostgreSQL/PostGISに実装されている空間演算プログラムを使い、国土数値情報で提供されてい

るパーソントリップ調査小ゾーンのポリゴンデータを部分結合させ、ある時点で訪問していた小ゾーンコード名を新たに属性値として追加した。また、トリップ目的は地域間の移動つまりトリップ時のデータにしか付加されておらず、訪問したゾーンでの滞留は「その他」となっていたため、トリップ終了後から次のトリップ開始時までの滞留を直前のトリップ目的に該当する実際の活動とみなし、新たな属性値として追加した。ここで構築した滞留データが主な分析の対象となる。

なお、データに関しての注意点を先に述べると、10月1日は「都民の日」であり、東京都内の公立小中学校や都立高校が休みになること、都営の観光施設を無料で利用できることから、これに該当する若者の観光・レジャーに何らかの特別な影響が生じていることが予想される。

2. 分析方法

本研究では、時間と空間の二つの側面から東京大都市圏における若者の日帰り観光・レジャーを分析する。まず、時間的な分析として、ある集団の中で特定の活動を選択した人々の数が集団全体の人数に占める割合を「選択率」と定義し、その推移をみる。これによって、ある集団の中で、ある時間に、どの活動が特に活発なのかがわかる。そして、その中で観光・レジャーの選択率だけを取り出し、職業・学生種別など属性ごとに一つにまとめた時系列グラフを作成し、それらの傾向を明らかにする。次に、空間的な分析として、小地域ゾーンごとの訪問者数を算出し、その分布を地図上に可視化させる。それを、職業・学生種別、昼夜別、性別にみていくことで、どのような若者がいつどこに観光・レジャー目的で訪問する傾向にあるのかを明らかにする。なお、職業・学生種別の分析では、小地域ゾーンごとの属性別訪問者数を基にしたクラスタリング（k-means法）を行

い、若者の観光・レジャーによる訪問動向からみて特徴的なゾーンを抽出する。最後に、これらの分析結果をふまえ、東京大都市圏における若者の日帰り観光・レジャーの時間的・空間的特性と、それをもたらし要因について考察を加える。データの解析に使用したソフトウェアはR (ver.3.2.4)、解析結果の地図描写に使用したソフトウェアはArcGIS (ver.10.4.1) である。

3. サンプル属性

サンプルの属性別集計結果を表1に示す。1,698人中、男性と女性は割合としては半々だが、女性の方がやや多い。居住地を都県別にみると、東京都と神奈川県に居住者が多く、この二つで約6割を占める。表1の職業・学生種別は、元々のデータに含まれる年齢（5歳階級別）と職業・学生種別の属性情報を組み合わせて、再構築したものである。労働者（20-34歳）のサンプル数が最も多く、次いで園児・小学校低学年（5-9歳）のサンプル数が多い。

Ⅲ 若者の日帰り観光・レジャーの時間的特性

1. 職業・学生種別の観光・レジャー選択率³⁾

職業・学生種別の観光・レジャー選択率をみると（図1）、園児・小学校低学年（5-9歳）及び小学校高学年・中学生（10-14歳）では、昼間から夕方にかけて観光・レジャー選択率が35～50%の高い値で推移している。特に園児・小学校低学年（5-9歳）では、11時から13時頃までの昼間に観光・レジャー選択率が50%超のピークに達しており、他の層と比べてもこの時間帯への集中傾向が著しく高い。水曜日にも関わらず、昼間に多くの子どもが観光・レジャーをしているが、これは「都民の日」による効果であろう。そして、選択率は15時頃までに値が約25%に低下するものの、16時前後になると再び値が増加し、16時半

表1 サンプル属性

項目	属性	N	%
性別	男性	778	45.8
	女性	920	54.2
計		1698	100
都道府県	東京都	666	39.2
	神奈川県	506	29.8
	埼玉県	285	16.8
	千葉県	214	12.6
	茨城県	27	1.6
	計	1698	100
職業・学生種別 (想定年齢)	園児・小学校低学年（5-9歳）	378	22.3
	小学校高学年・中学生（10-14歳）	245	14.4
	中学生・高校生（15-18歳）	58	3.4
	大学生・短大生（18-29歳）	142	8.4
	労働者（20-34歳）	537	31.6
	主婦・主夫（20-34歳）	232	13.7
	無職（20-34歳）	86	5.1
	その他	20	1.2
	計	1698	100

には約35%にまで到達している。これは、他に幼稚園や小学校が終わってから観光・レジャーをする人がいたためであろう。夜間外出が少ない理由として、子どもは安全性の観点から自発的な夜間外出が保護者によって制限されていること、夜間外出が社会的に推奨されていないことが考えられる。そのため、子どもの場合は明るい昼間に観光・レジャーを行い、夕方早くに帰宅するパターンとなる。ただし、基本的に保護者が同伴する家族や親戚などグループ単位での行動であることから、夜間でも観光・レジャーを実行している人を少しではあるが観測できる。

中学生・高校生（15-18歳）および大学生・短

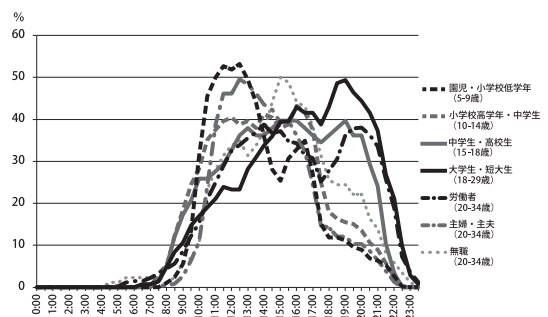


図1 職業・学生種別の観光・レジャー選択率

大生（18-29歳）は、18時以降の夜間での観光・レジャー選択率が35%以上の高い値を示す。したがって、これらの若者が夜間での観光・レジャーを最も活発に行っていると判断できる。中学生・高校生（15-18歳）は20時以降に選択率は急減し、22時にはほぼゼロになる。大学生・短大生（18-29歳）は22時の遅い時間でも選択率が20%を超えており、24時直前まで選択率はゼロにならない。そして、昼間よりも夜間の方が、観光・レジャー選択率がとりわけ高く、ピークとなる19時頃には選択率が約50%にまで到達している。成人として自己裁量で生活できること、アルバイトなどでの収入を得られることによる時間的・金銭的余裕が、積極的な夜間外出を可能にしていると考えられる。ここで、学習環境の異なる園児・小学校低学年（5-9歳）、小学校高学年・中学生（10-14歳）、中学生・高校生（15-18歳）および大学生・短大生（18-29歳）の四つのタイプを比べると、年齢が上がるにつれて、観光・レジャーの主な活動時間が昼間から夜間にシフトすることがわかる。後者になるほど、生活での自己裁量が大きくなり、他力中心から自力中心へと旅行能力が向上する。そのため、観光・レジャーの活動時間が夜間にまで拡大していくのであろう。

労働者（20-34歳）の場合、観光・レジャー選択率が高いのは、12時から16時頃までの昼間・夕方と、19時から21時頃までの夜間であり、どちらも約40%の値である。つまり、観光・レジャーの活発さがピークとなる時間帯が二つ存在する。昼間に観光・レジャーをしていた人は、定休日あるいは有給休暇を消化中であつたと推察できる。一方、夜間での観光・レジャーの場合、昼間・夕方から活動を継続する人、勤務終了後に観光・レジャーだけを目的として外出していた人が混在していると考えられる。ただし、今回の分析結果は

水曜日のデータから得たものであるため、一般的に平日勤務・休日休みの労働者が夜間外出を楽しむやすい「華金」（金曜日）や土日祝日に同様の調査をした場合に、異なる結果が導き出される可能性がある。

主婦・主夫（20-34歳）では、11時から15時にかけて観光・レジャー選択率が40%以上と高く、16時から17時にかけて急減し、それ以降では選択率が15%を下回る。つまり、昼間での観光・レジャーが中心で、夜間での活動はあまりみられない。これは、主婦・主夫には家事や育児に追われている人が多いことや、家族間での交流が主体となり友人・知人との交流が少なくなること、夜間外出の機会も減ることが要因だと考えられる。

2. 性別の観光・レジャー選択率

男性と女性とで観光・レジャーに時間的な違いがあるかを分析する。夜間外出の目立つ大学生・短大生（18-29歳）と労働者（20-34歳）に絞り、それぞれ男女別に観光・レジャー選択率の時間的推移を示したものを図2に示す。

大学生・短大生（18-29歳）の場合、男性では朝から時間の経過に伴って徐々に観光・レジャーを行う人の割合が増加し、夕方に40%超のピークが出現している。一方で女性の場合、朝から昼

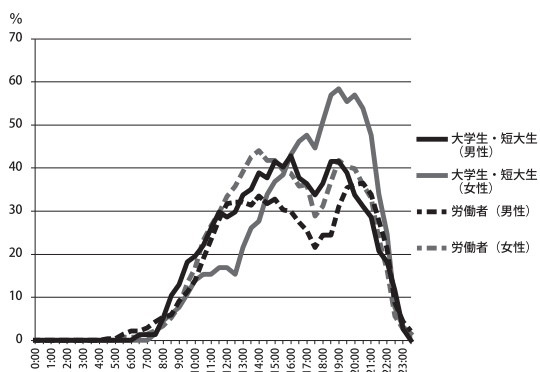


図2 男女別の観光・レジャー選択率

までは観光・レジャー選択率は高くないものの、13時頃から夜になるにつれて値が上昇し、19時頃にピークを迎え、その値は60%近くにもなる。したがって、大学生・短大生（18-29歳）の場合、女性の方が夜間に観光・レジャー目的で行動している。夜間の都心部には、夜景、お洒落な飲食店、イベントなど女性を魅了する観光対象が多く集積しているため、それを目当てにしていると考えられる。これに関しては、IV章2節で詳しく述べる。

労働者（20-34歳）の観光・レジャー選択率の場合、男性と女性のどちらにおいても、昼間と夜間の二つの時間帯にピークがくるパターンを示している。しかし、女性の方の値がピーク時に40%を超え、かつ昼間から夜間にかけて35%以上を超えることが多いのに対し、男性の方は同じ時間帯で20～30%前後の比較的低い値で推移している。したがって、この属性の若者では女性の方が男性よりも昼夜問わずに観光・レジャーを積極的にする人々が多い。公益財団法人日本交通公社（2014）の「JTBF 旅行需要調査」⁴⁾では、20代と30代の男女において女性の方が男性よりも旅行に対する意欲が高いという結果が出ているが、本研究で対象とする日帰り観光・レジャーにおいても、これと類似した傾向がみられる。

IV 若者の日帰り観光・レジャーの空間的特性

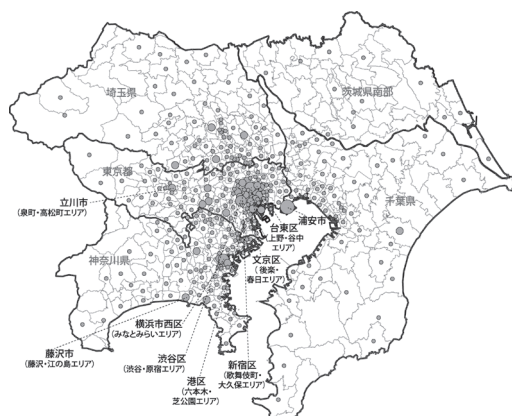
1. 職業・学生種別の観光・レジャー訪問先⁵⁾

1) 訪問先の分布

若者による観光・レジャーの空間的特性、つまり彼らがどこを観光・レジャーの目的地として訪問しているのかを明らかにする。小地域ゾーンごとに訪問者数を集計して地図上に可視化したものを図3に示す。

若者全体（15-34歳）の訪問先で特に人気のゾーンは、浦安市、文京区（後楽・春日エリア）、渋谷区（渋谷・原宿エリア）、横浜市西区（みなと

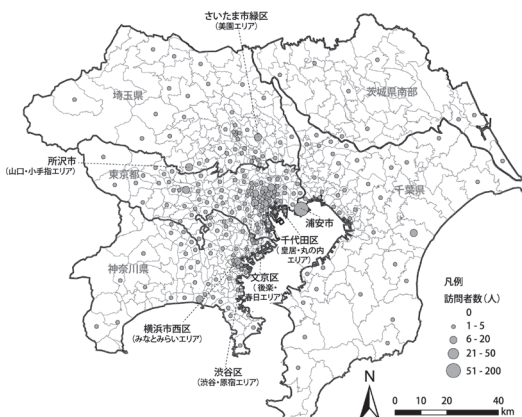
みらいエリア）、立川市（泉町・高松町エリア）、港区（六本木・芝公園エリア）、新宿区（歌舞伎町・大久保エリア）、台東区（上野・谷中エリア）、



(a)若者全体（15-34歳，N=1075）



(b)園児・小学校低学年（5-9歳，N=378）



(c)労働者（20-34歳，N=537）

図3 観光・レジャー目的での訪問者数の分布

藤沢市（藤沢・江の島エリア）である（図3（a））。第1位の浦安市は訪問者数が129人と群を抜いて多いが、ここには集客力の極めて高い観光・レジャー施設である東京ディズニーリゾート（以後、TDR）が立地している。第2位である文京区（後楽・春日エリア）、渋谷区（渋谷・原宿エリア）、横浜市西区（みなとみらいエリア）への訪問者数は21人である。文京区（後楽・春日エリア）には「東京ドーム」や「東京ドームシティ」といった競技場や観光・レジャー施設が立地している。横浜市西区（みなとみらいエリア）には、「みなとみらい21」という若者のデートスポットとなる観光・商業施設が集積する都市型観光地がある。渋谷区（渋谷・原宿エリア）には、若者の集まることで知られる繁華街や商業施設がある。立川市（泉町・高松町エリア）には「昭和記念公園」といった鑑賞型観光資源が、港区（六本木・芝公園エリア）や新宿区（歌舞伎町・大久保エリア）には渋谷区（渋谷・原宿エリア）と同様に若者の訪れる繁華街や商業施設が、台東区（上野・谷中エリア）には文化施設や動物園の集積する上野公園や観光色の強い商店街であるアメヤ横丁がそれぞれ立地している。そして、藤沢市（藤沢・江の島エリア）にある江の島は、若者の友人や家族連れのグループでの日帰り旅行によく利用される（中岡、2012）。

年齢や職業・学生種別によっても観光・レジャー訪問先には差異がある。例として、子どもと若者それぞれにおいてサンプル数の最も多い集団である園児・小学校低学年（5-9歳）と労働者（20-34歳）とを比較する（図3（b）（c））。前者では浦安市、横浜市青葉区（青葉台・奈良町エリア）、日野市（程久保・平山エリア）、江東区（青海エリア）、立川市（泉町・高松町エリア）の訪問者数が多い。TDRのある浦安市が人気なのは当然として、「お台場」として知られる江東区（青

海エリア）は家族で楽しめる観光・商業施設が集積している。横浜市青葉区（青葉台・奈良町エリア）には「こどもの国」、日野市（程久保・平山エリア）には「多摩動物公園」、立川市（泉町・高松町エリア）の「昭和記念公園」には「こどもの森」といったように、子どもを主要な顧客層とした観光・レジャー施設が立地している。他方、後者では、浦安市、渋谷区（渋谷・原宿エリア）、千代田区（皇居・丸の内エリア）、所沢市（山口・小手指エリア）、文京区（後楽・春日エリア）、横浜市西区（みなとみらいエリア）、さいたま市緑区（美園エリア）への訪問者数が多い。さいたま市緑区（美園エリア）には、サッカー専用の競技場である「埼玉スタジアム」が立地しており、サッカー好きの若者が多く訪れる。以上より、年齢問わずTDRという魅力的なテーマパークへの訪問者数が多いことは共通しているが、子どもは子ども専用の観光施設のあるゾーンに訪れるという明快なパターンをとる傾向に、成人した若者は観光・レジャーにおいて知名度の高いスポットのあるゾーンを訪れる傾向にある。このように、若者と子どもとを比較すると、観光・レジャー訪問先として共通する部分とそうでない部分がある。

2）訪問先の類型化

ここでは、全ての職業・学生種別を統合した上で、若者の観光・レジャーにとって重要なゾーンを明らかにするため、若者・子どもの属性別訪問者数から小地域ゾーンをクラスタリングする。ゾーン番号×職業・学生種別からなる訪問者数の行列において、各列を平均0、分散1に標準化し、Gap統計量を基に機械的にクラスター数を求め、k-means法を実行した結果、八つの地域クラスターを抽出した。図4の標準化得点平均の累積グラフをみると、各地域クラスターにおいてどのような職業・学生種別の若者が比較的多く訪れたのかを判別できる。地域クラスター1,2,3,4,7で

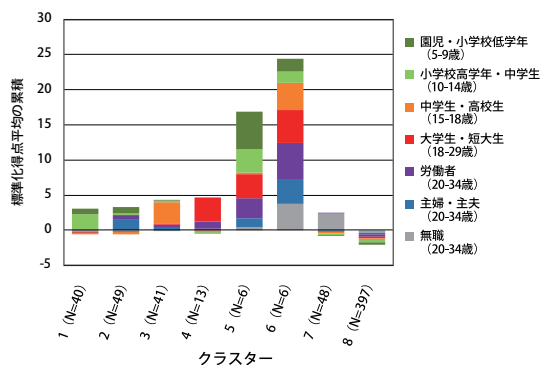


図4 八つの地域クラスターの特徴

は、それぞれ小学校高学年・中学生（10-14歳）、主婦・主夫（20-34歳）、中学生・高校生（15-18歳）、大学生・短大生（18-29歳）、無職（20-34歳）の得点平均が高く、これらの若者・子どもが訪問先のゾーンを特徴づけていることがわかる。次に、地域クラスター5、6では、得点平均の累積値が非常に高く、かつ各属性の得点平均も高いことから、様々な職業・学生種別の若者・子どもが訪れ、かつその数も多いことがわかる。したがっ

て、地域クラスター5、6は若者・子どもの日帰り観光・レジャーにおいて最も重要なゾーンであると言える。地域クラスター5は園児・小学校低学年（5-9歳）と小学校高学年・中学生（10-14歳）と年齢の低い層の得点平均が高いことが特徴であるが、大学生・短大生（18-29歳）や労働者（20-34歳）といった年齢の高い若者の得点平均も同じくらい高い。地域クラスター6は、労働者（20-34歳）と大学生・短大生（18-29歳）といった成人や、その前の中学生・高校生（15-18歳）の得点平均が高いことが特徴である。ただし、14歳以下の子どもの得点平均も比較的高く、地域クラスター5の場合ほどではないが、地域クラスター1と同程度の値となっている。最後に、地域クラスター8は、得点平均がどの職業・学生種別でもマイナスの値をとっていることから、若者・子どもが観光・レジャー目的で訪れない、もしくは極少数しか訪れないかのどちらかであることがわかる。

さて、各地域クラスターの分布に浦安市を加えた図5をみると、若者・子どもの観光・レジャー

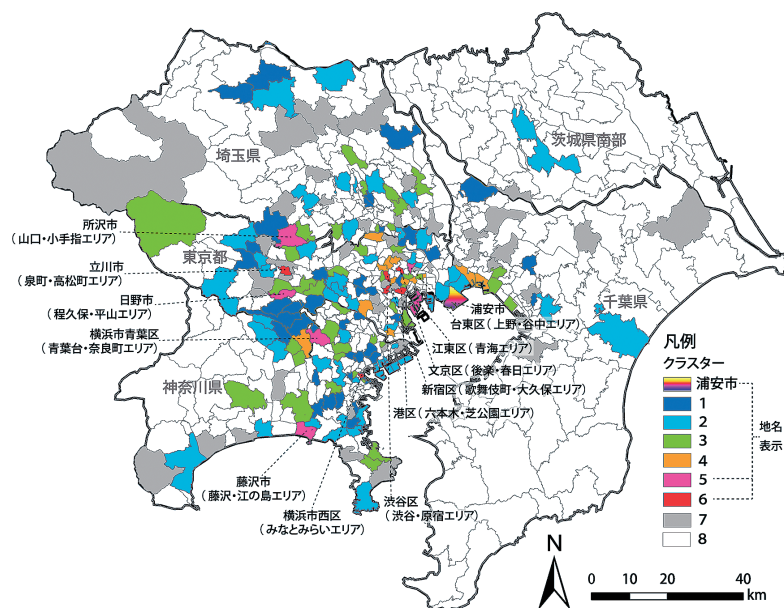


図5 8つの地域クラスターの空間分布

訪問先として最も重要なゾーン集合の一つである地域クラスター5は、江東区（青海エリア）、台東区（上野・谷中エリア）、所沢市（山口・小手指エリア）、日野市（程久保・平山エリア）、横浜市青葉区（青葉台・奈良町エリア）、藤沢市（藤沢・江の島エリア）の六つのゾーンで構成されていることがわかる。どのゾーンにも遊園地や動物園といった子どもが楽しめる観光スポットが立地している。このことは同時に、成人して家庭をもっている若者にとっても訪れやすい観光スポットが存在していることを示している。これらのゾーンは主に都心の周辺に位置し、通勤・通学者などで混雑する都心への移動が少ない、あるいは郊外の居住地から車によるアクセスがしやすいため、子どものいる家族が訪れやすいのだと考えられる。もう一つの重要な地域クラスター6は、港区（六本木・芝公園エリア）、渋谷区（渋谷・原宿エリア）、新宿区（歌舞伎町・大久保エリア）、文京区（後楽・春日エリア）、立川市（泉町・高松町エリア）、横浜市西区（みなとみらいエリア）の六つのゾーンで構成されている。地域クラスター6には、それぞれに繁華街や大型観光施設が立地しているが、どれも若者だけでなく様々な年齢の人々が訪れる大衆的な商業・観光空間である。これら地域クラスター5、6に属するゾーンと浦安市は、若者・子どもの観光・レジャーにとっての機能的中心を担っている。

2. 昼夜間別の観光・レジャー訪問先

Ⅲ章で若者の観光・レジャー選択率の推移を調べた結果、夜間外出を活発に行う層が存在した。現代では夜間の経済活動は都市の発展や魅力度向上に資するものとして、注目されている（木曾, 2017）。Ⅲ章での分析結果から分かる通り、夜間の観光・レジャー選択率の高さは、15歳以上の若者にみられる特徴でもある。そのため、若者の

夜間での観光・レジャーを空間的な側面からも把握することが必要である。本節では、若者の夜間外出における訪問先の特徴を、昼間の場合との比較によって明らかにする。

昼夜別に観光・レジャーの活動者数の空間分布を可視化した地図を図6に示す。ここでは、訪問先選択の自由度が高く、加えて夜間での観光・レジャー選択率の高い、大学生・短大生（18-29歳）と労働者（20-34歳）を合わせたデータを使用する。まず、昼13時の時点での活動者数の分布をみると、都心から箱根に至るまで広範囲で観光・レジャーが行われていることがわかる。活動者数の特に多かったゾーンは浦安市、藤沢市（藤沢・

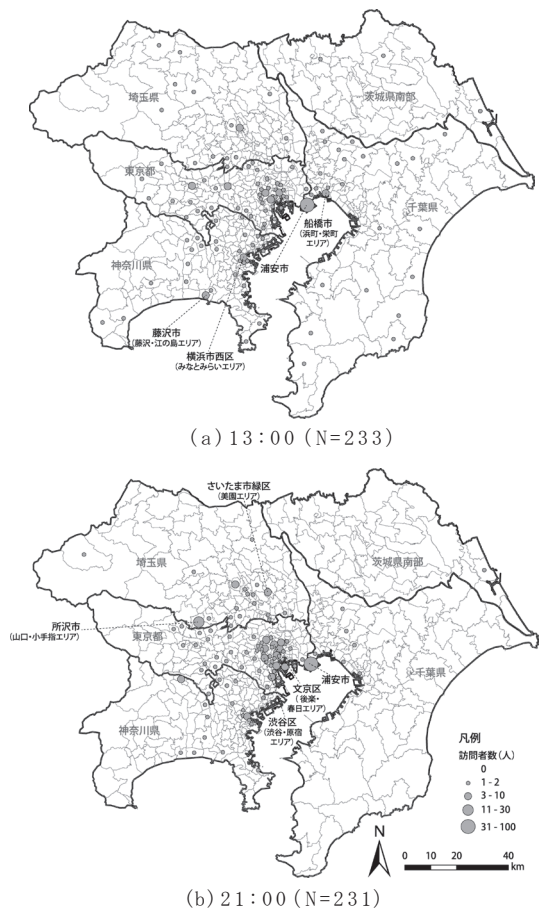


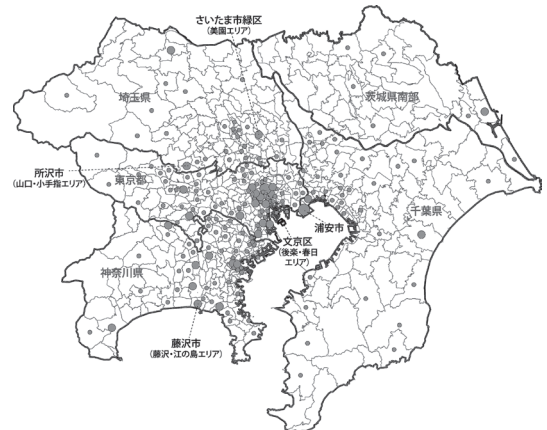
図6 昼夜別の観光・レジャー活動者数の分布

江の島エリア)、横浜市西区(みなとみらいエリア)、船橋市(浜町・栄町エリア)である(図6(a))。一方、夜21時の活動者数の分布をみると、活動者数の多いゾーンは浦安市、所沢市(山口・小手指エリア)、さいたま市緑区(美園エリア)、文京区(後楽・春日エリア)、渋谷区(渋谷・原宿エリア)である(図6(b))。

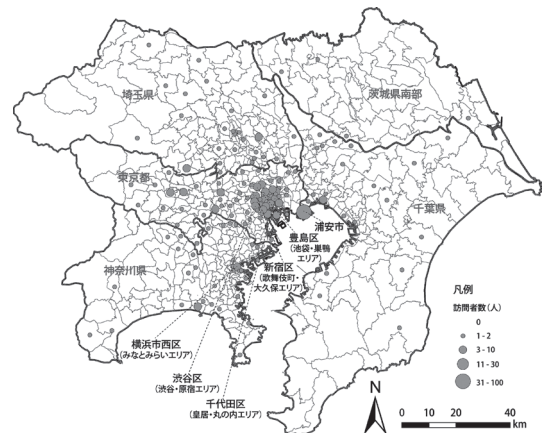
昼と夜とでの観光・レジャー訪問先の共通点として、浦安市における観光・レジャーの活動者数が13時と21時のどちらの時点でも多いことが挙げられる。浦安市内のTDRでは朝・昼と夜とで異なる価格のチケットが販売されていること、閉園時間が22時であること、夜間にもパレードなどのイベントが開催されていることから、若者にとって様々な時間帯での訪問や長時間の滞在が可能である。そして、昼夜で異なる点としては、昼間は商業施設や屋外での活動が主体となる名の知られた観光資源が立地するゾーンに若者が多く訪れているが、夜間だと若者の街として知られる渋谷区(渋谷・原宿エリア)が上位にある他、競技場の立地しているゾーンの訪問者数も比較的多い。所沢市(山口・小手指エリア)には西武ドームが、さいたま市緑区(美園エリア)には埼玉スタジアムが、文京区(後楽・春日エリア)には東京ドームがあり、それぞれ夜間でも楽しめる商業・娯楽施設が付帯している。つまり、夜間の場合は東京都心の繁華街のあるゾーンや都心周辺の競技場のあるゾーンに、若者の訪問が集中する傾向にある。また、陸域だけでなく、江東区(青海エリア)のような臨海部にも、若者が夜間に訪れている。

3. 性別の観光・レジャー訪問先

最後に、性別によって若者の観光・レジャーの空間的特性にどのような違いがあるのを分析する。図7に男性と女性の訪問先の分布を示す。前



(a) 男性 (N=381)



(b) 女性 (N=341)

図7 男女別の観光・レジャー活動者数の分布

節と同様に大学生・短大生(18-29歳)と労働者(20-34歳)を合わせたデータを使用する。

男性の場合、訪問者数の多かったゾーンは、浦安市、文京区(後楽・春日エリア)、藤沢市(藤沢・江の島エリア)、所沢市(山口・小手指エリア)、さいたま市緑区(美園エリア)である(図7(a))。競技場のあるゾーンが上位にあるのが特徴的である。一方で女性の場合、訪問者数の多かったゾーンは、浦安市、渋谷区(渋谷・原宿エリア)、横浜市西区(みなとみらいエリア)、千代田区(皇居・丸の内エリア)、豊島区(池袋・巣鴨エリア)、新宿区(歌舞伎町・大久保エリア)といった東

京都心の繁華街のあるゾーンである（図7（b））。また、男女とも訪問者数の第1位が浦安市であることは同じだが、男性は浦安市への訪問者数が全体の6.6%を占めるのに対し、女性では全体の18.5%とより大きな割合を占める。したがって、男性よりも女性の方が浦安市への訪問集中が強い傾向にある。浦安市に立地するTDRが、女性が喜ぶ親しみやすいキャラクターをテーマにした観光・レジャー施設であることが、女性の訪問集中を誘発しているのであろう。

これらの結果から、男性と女性とで観光・レジャー訪問先は異なる傾向にあるとわかる。前節において、夜間に競技場のあるゾーンでの活動者数が多かったが、その中心は男性であることが推察される。そして、夜間に繁華街のあるゾーンへ訪問した顧客の中心は女性であると推察される。実際に、夜21時の男性と女性それぞれの訪問先の傾向をみたところ、男性では訪問者数上位5位以内のゾーンに、所沢市（山口・小手指エリア）、さいたま市緑区（美園エリア）、文京区（後楽・春日エリア）といった競技場のあるゾーンが出現していたのに対し、女性では上位5位以内に豊島区（池袋・巣鴨エリア）、渋谷区（渋谷・原宿エリア）、千代田区（皇居・丸の内エリア）といった繁華街のあるゾーンが出現していた。男女の嗜好性の違いが訪問先の違いとなって表面化したのであろう。男性はスポーツ観戦などのイベントを、女性は商業・娯楽施設でのショッピングを観光・レジャー時の活動に選択した人が比較的多かったのだと考えられる。公益財団法人日本交通公社（2014）の「JTBF旅行需要調査」では、「性・年代別 行ってみたい旅行タイプ」の回答結果（複数回答）において、20代男性だけにスポーツ観戦（9位）が上位に出現している。また、女性の回答をみると20代だけにショッピング（4位）と都市観光（5位）が上位に出現している。本研

究の分析結果をみると、こうした若い男女の旅行意向（嗜好性）の違いが、日帰り観光・レジャーにおいても行動の空間パターンの差異として現れていることを確認できる。

V おわりに

本研究では、大規模人流データを使用し、東京大都市圏における若者の日帰り観光・レジャーの時間的・空間的特性を明らかにした。

分析の結果、年齢や職業・学生種別あるいは性別によって、若者の観光・レジャー目的での外出時間や訪問先にみられる特性が異なることがわかった。外出時間に着目した時間的特性の分析では、年齢が高くなるにつれて観光・レジャーの活動時間が昼間だけでなく夜間にも拡大すること、成人では学業、労働、家事を主体とした職業・学生種別がそれぞれもつ生活上の制約によっても観光・レジャーの活動時間に差異が生じること、性別比較では男性より女性の方が夜間外出をする人の割合が大きいことなどが明らかとなった。訪問先に着目した空間的特性の分析では、若者にとって浦安市が最も人気のある訪問先であることがわかった。また、それ以外のゾーンを類型化すると特定タイプの若者の訪問が目立つゾーンや様々な属性の若者・子どもが多く訪れるゾーンが抽出された。そして、特に後者は若者の観光・レジャーにとって重要な地域であること、昼夜別かつ男女別で訪問先選択の傾向が異なることなどが明らかとなった。

次に、職業・学生種別に観光・レジャーの特徴をまとめると以下ようになる。園児・小学校低学年（5-9歳）及び小学校高学年・中学生（10-14歳）では、昼間から夕方にかけての観光・レジャー選択率が著しく高く、郊外のゾーンへの訪問が目立った。特に園児・小学校低学年（5-9歳）に関しては、郊外にある子ども向けの観光・レ

ジャー施設の立地するゾーンに多くの人が訪れていた。中学生・高校生（15-18歳）、大学生・短大生（18-29歳）および労働者（20-34歳）は、18時以降の夜間での観光・レジャー選択率が高い。したがって、これらの層が夜間での観光・レジャーを活発に行っていると判断できる。ただし、労働者（20-34歳）になると昼間・夕方に活動する人と、夜間に活動する人の二つのタイプに分かれる。昼夜での観光・レジャー訪問先の違いとしては、昼間には商業施設や屋外での活動が主体となる有名な観光スポットが立地するゾーンに若者が訪れやすいが、夜間だと東京都心の繁華街のあるゾーンやその周辺の競技場のあるゾーンに若者の訪問が集中する傾向にある。さらに夜間の場合、競技場のあるゾーンを男性が、東京都心の繁華街のあるゾーンを女性が訪問しやすい。主婦・主夫（20-34歳）の観光・レジャーは、昼間が中心で夜間での活動は少ない。これは自宅での家族間交流の重視や家事・育児による制約が関係していると考えられる。

このように、本研究では、若者に焦点を当て、これまで把握することが難しかった都市住民の日帰り観光・レジャーを都市圏という空間スケールで網羅的に把握することに成功した。特に、東京大都市圏での夜間の観光・レジャー動態を定量的な分析によって明らかにしたのは、本研究が初めてである。また、個人属性やトリップ目的のデータとの組み合わせにより、属性別に若者の観光・レジャーの行動特性を明らかにすることができた。そして、本研究の定量的な分析から、若者の観光・レジャーにとって重要な地域を特定することができた。東京のような大都市は流行の発信地であるという性質から若者の交流空間という側面も兼ね備えている。本研究が分析結果として示した浦安市や地域クラスター5・6のゾーンは、その機能的中心の役割を担っていると考えられる。

本研究は日帰り観光・レジャーを分析対象としているため、国内宿泊旅行や海外旅行で主な課題となっている若者の「旅行離れ」に対して直接的な課題解決に結びつく知見提供ができるわけではない。しかし、より広く「若者の観光需要を高める」という課題に対してのヒントはあった。例えば、若者は年齢、性別、職業・学生種別などの属性で様々に分類可能であり、それぞれの嗜好性、旅行能力、制約などに応じて観光・レジャーの時間と空間を選択するため、それを考慮した地域プロモーションなどの各種施策を行うことで若者の観光需要や地域の集客力を高められる可能性がある。居住地（市場）と目的地が近い日帰り観光・レジャーにおいては、GISのエリアマーケティング技術を応用することで、周辺の若年人口特性から重点ターゲットとするエリアを選定することも可能であろう。そして、都心部における夜間の観光・レジャーは若者の実施率が高く、需要があるため、ナイトタイムエコノミー振興を見据えた都市基盤整備を行うことが効果的かもしれない。このことは、日帰り観光・レジャーをする若者だけでなく、ビジネス客や外国人訪問客の観光消費を促進することにも役立つだろう。

最後に研究の課題と展望を述べる。本研究では、若者の観光・レジャーの時間ごとの選択率やゾーンごとの訪問者数といったマクロな側面を扱っており、個人の移動軌跡やトリップ連鎖などミクロな側面は分析対象としていない。今後はマクロな動態を形成する個人の動きを細かく分析することで、若者の観光・レジャーの特性を精緻化していく必要がある。その中で、今回扱わなかった居住地が訪問先選択に与える影響についても検討していきたい。なぜなら、東京大都市圏では都心から放射状に伸びる鉄道沿線が個人の生活圏・行動圏と濃密に重なっているため、居住地別に訪問先の傾向が異なることが予想されるからである。

また、使用したデータが2008年のものであるため、ここ10年間の都市開発の影響がデータに反映されていない。本稿執筆までに、東京スカイツリーや渋谷ヒカリエなどの話題性の高い施設が開業しており、それらが若者の観光・レジャーの空間選択に与えた影響は大きいと考えられる。また、特定の1日を対象としたデータを使用したため、今回の分析結果がどれだけロバストな性質なのかを検証できていない。他の調査で得られたデータや最近提供されているビッグデータとの併用により、季節の違いや平日と休日との違いを検討し、本研究で得られた知見のさらなる精緻化と一般化に取り組む必要がある。

【付記】

本研究の骨子は、第10回地理空間学会大会のシンポジウム「大都市における若者の観光・レジャーの行動と空間」にて発表しました。

本研究の遂行にあたり、日本観光研究学会分科会「若者の観光行動と地域受容基盤に関する研究」の活動経費およびJSPS科研費（若手研究（B）15K21269）の一部を使用しました。

本研究は若者観光研究グループ（活動は<http://wakamonotourism.wixsite.com/wakamono>を参照）による研究成果でもあり、謝辞に記したシンポジウムにおける総論として位置づけられます。詳細な各論は『地理空間』10巻3号の特集号を参考にしてください。

注

- 1) 東京大都市圏でのパーソントリップ調査の実施主体は、東京都市圏交通計画協議会である。1968年に実施された第1回の調査から10年ごとに継続調査が行われている。本研究で使用したデータは、第5回パーソントリップ調査の結果が基になっている。
- 2) 第5回パーソントリップ調査の個人票では、余暇に係るトリップ目的として、「食事・社交・娯楽へ（日常生活圏内）」と「観光・行楽・レジャー（日常生活圏外）」の2種類の選択肢がある。退社後の飲み会や自宅での交友は前者に該当するため、本研究で扱うデータには含まれていない。なお、「行

楽」は「観光」に含まれるため、本研究では「観光・レジャー」として簡略化して表記する。

- 3) 本研究での時間の区分は、気象庁の一日の時間細分の用語（http://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/yougo_hp/toki.html#A23）を参考にしている。つまり、6時頃から9時頃までを「朝」、9時頃から11時頃までを「昼前」、11時頃から13時頃までを「昼」や「昼間」、13時頃から15時頃までを「昼過ぎ」、15時頃から18時頃までを「夕方」、18時から翌日の6時頃までを「夜」や「夜間」と呼ぶ。
- 4) 2014年の「JTBF旅行需要調査」では、2014年5月に全国15～79歳の男女を対象に、訪問留め置き調査を行い、主に旅行回数、旅行意向、ほか旅行に関する意識を尋ねている。この年のサンプル数は全部で1,200人で、内10代と20代と30代の男性はそれぞれ36人、76人、101人である。また、女性の場合、10代と20代と30代のサンプル数は、それぞれ36人、75人、97人である。
- 5) 小地域ゾーンの範囲では一つの市区町村が複数に分割されている場合がある。分割されていない場合は市区町村名だけを、分割されている場合は市区町村名の後ろに「(〇〇エリア)」というように括弧書きで目安となる地名を記す。地名の選択には、そのゾーン内の代表的な駅や観光・レジャー施設の住所を基準にしている。

文 献

- 岡本耕平（1995）：大都市圏郊外住民の日常活動と都市のデイトリー・リズム。地理学評論，68A，1-26。
- 奥山忠裕・日比野直彦・森地 茂（2010）：若年層の観光活動の減少要因に関する研究。運輸政策研究，13，75-84。
- 落合康浩（1991）：神奈川県中西部における余暇活動の空間的展開。経済地理学年報，37，245-265。
- 落合康浩（1996）：大学生の日常的空間内における外出型レジャーの行動パターン。日本大学文理学部自然科学研究所「研究紀要」，31，93-104。
- 落合康浩（1999）：首都圏に居住する大学生の非日常的な外出型レジャー行動の空間パターン。日本大学文理学部自然科学研究所「研究紀要」，34，61-72。
- 観光庁（2011）：若年層の旅行性向・意識に関する調査・分析 報告書。 <https://www.mlit.go.jp/common/000161446.pdf> [Cited: 2017/8/5]
- 観光庁（2014）：将来的な商品化に向けた観光資源磨きのモデル調査業務。 <http://www.mlit.go.jp/common/001039774.pdf> [Cited: 2017/8/5]

- 観光庁 (2017): 旅行・観光産業の経済効果に関する調査研究 (2015年度版). <http://www.mlit.go.jp/common/001190278.pdf> [Cited: 2017/8/5]
- 木曾 崇 (2017): 『「夜遊び」の経済学－世界が注目する「ナイトタイムエコノミー」』 光文社.
- 公益財団法人日本交通公社 (2014): 日本人の生活と旅行に関する意識. 旅行年報2014, 48-58. <https://www.jtb.or.jp/wp-content/uploads/2014/10/nenpo2014p48-58.pdf> [Cited: 2017/8/5]
- 小島大輔 (2008): 熊本市における観光行動の空間的特性: 主要施設来訪者の行動分析から. 地理科学, **63**, 49-65.
- 澁谷和樹 (2016): 外出時間にみた大都市圏郊外住民の余暇活動の空間構造－町田駅周辺住民を対象に－. 地理空間, **9**, 171-188.
- 杉本興運 (2017): イベント開催時における訪問者の目的的地内移動パターン－東京都・上野公園でのフェスティバルを事例に－. 観光研究, **29**, 17-28.
- 杉本興運・岡野祐弥・菊地俊夫 (2013): レンタサイクル利用による観光回遊行動の実態－長野県安曇野市におけるGPS・GIS支援による調査とデータ解析. 観光研究, **24**, 15-27.
- 杉本興運・小池拓矢 (2015): 富士山麓地域における観光行動の特徴－着地からの旅行距離に着目して－. 地学雑誌, **124**, 1015-1031.
- 杉本興運・村山祐司 (2014): 東京都市圏における一日の観光動態の時空間的可視化. 日本観光研究学会全国大会学術論文集, **29**, 113-116.
- 高橋伸夫 (1987): 日本の生活空間にみられる時空間行動に関する一考察. 人文地理, **39**, 295-318.
- 滝波章弘 (1994): ツーリズム空間の同心円性と関係距離の抽出－横浜市立小学校家庭の家族旅行のデータから. 人文地理, **46**, 121-143.
- 中岡裕章 (2012): 江の島における日帰り観光の実態. 地理誌叢, **53**, 20-30.
- 中村 哲・西村幸子・高井典子 (2014): 『「若者の海外旅行離れ」を読み解く』 法律文化社.
- 原田陽平 (2016): 『パリピ経済: パーティピープルが市場を動かす』 新潮社.
- 日比野直彦・佐藤真理子 (2012): 若者と旅－若年層の国内観光行動の時系列分析－. 国際交通安全学会誌, **37**, 58-66.
- 藤本耕平 (2015): 『つくし世代: 「新しい若者」の価値観を読む』 光文社.
- 古市憲寿 (2015): 『絶望の国の幸福な若者たち』 講談社.
- 矢部直人・倉田陽平 (2013): 東京大都市圏におけるIC乗車券を用いた訪日外国人の観光行動分析. GIS－理論と応用, **21**, 35-46.
- 山口 誠 (2010): 『ニッポンの海外旅行: 若者と観光メディアの50年史』 筑摩書房.
- 吉田 樹・杉町大輔・太田悠悟・秋山哲男 (2008): 都市地域の短時間観光行動の実態とその調査手法構築に向けた基礎的検討. 観光科学研究, **1**, 9-18.
- 若生広子・高橋伸夫・松井圭介 (2001): ライフステージからみた女性の観光行動における空間的特性. 新地理, **49**, 12-33.

Spatial and Temporal Patterns of Youth Tourists' Day-Trip Behaviour in the Tokyo Metropolitan Area: Use of Large Amount of People Flow Data

SUGIMOTO Koun

Faculty of Urban Environmental Sciences, Tokyo Metropolitan University

Keywords : Youth, Day-Trip, Behavioural Space, Tokyo Metropolitan Area, Person Trip Survey